

後期中観派によるダルマキールティの刹那滅論の活用と批判

——後期中観思想の形成(1)——

森 山 清 徹

〔抄 録〕

ダルマキールティの刹那滅論に基づく因果論は後期中観派により次の点で活用もされ批判もされている。それは常住論批判の際、継時的同時的に因果効力をもち得ないという PVIInII56が活用され、また無常批判の際には PVIII246における因果同時論批判は活用される一方、因果異時論は批判されている。これらはカマラシーラの MāI, SDNS, BhK I における四不生因のうち他不生を論じる際に見出される。しかし、カマラシーラに限らずダルマキールティの刹那滅論に立脚する因果異時論に対してジュニャーナガルバは SDV で、シャーンタラクシタは SDP で、他にカマラシーラは MAP で結果は滅した因からであれば無因となり、滅していない因からであれば因果同時となる(刹那滅であることが損なわれる)というディレンマにより批判している。この方法は元来、クマーリラの ŚV におけるヤショミトラとディグナーガとの刹那滅に基づく因果異時論に対する批判に基づいていると考えられる。他方、シャーンタラクシタの TS、カマラシーラの TSP では、クマーリラの批判に対する答論としてダルマキールティの刹那滅論は活用されこそすれ、先の諸のテキストに見いだされる刹那滅論批判は存在しない。この相違は各テキストの著作目的が中観思想そのものを論証目的としているか否かにある。この点は後期中観派の思想体系を把握する上で極めて重要である。

キーワード 後期中観派、ダルマキールティ、刹那滅論に基づく因果論、反所証拒斥
検証、クマーリラ

後期中観派の諸論師はナーガールジュナの『中論』に直接、注釈を著してはいないが、カマラシーラは、『中論』第一章に表される自、他、自他の二、無因からの四不生を根拠とする無自性論証を表し詳細に論じている⁽¹⁾。取り分け、他不生の論証においては、広範な論議を展開し A. 常住な因からの生起と B. 無常な因からの生起とに二分し、仏教内外の諸思想を批判的に吟味している。その際、検証方法の基軸となっているものは、次のダルマキールティの刹

那滅論に立脚した因果論 (PvinII56, PVIII246) である。このことについては以前に Māl における他不生の論考の際、指摘したのであるが⁽²⁾、後期中観思想の形成という点から刹那滅に基づく因果論自体の活用、批判を十分究明したものではなかった。本稿では、この点に焦点を当てる。上の A. に対しては、PvinII56 (Cf. 本稿IV) の刹那滅でないものは継時的同時に作用し得ないことを基軸としている。また、その論証に関し、後代、推論の正当性が追究されるが、シャーンタラクシタ、カマラシーラは、その先駆的な方法として反所証拒斥検証、帰謬、帰謬還元法を用い、また内遍充論の萌芽といい得るものも表している⁽³⁾。

他方、B. の無常な因からの生起に関しては PVIII246 を基軸とし、その前半 ab 句の因果同時論批判は、しばしば導入され活用されている。しかし後半 cd 句の刹那滅論としての因果異時論は、無自性を立論する見地から批判され、それは本稿で究明する通り後期中観派の師資相承を顕著に表すものである。すなわち後期中観派とはダルマキールティの刹那滅論に立脚した因果論、認識論、論理学の活用を通じ他学派の諸哲学を段階的に論難し、また中観思想の確立に際しては、ダルマキールティの認識論や論理学を活用する一方、刹那滅論やアポーハ論に立脚した因果論⁽⁴⁾さえも批判し一切法無自性の確立を目指すジュニャーナガルバ、シャーンタラクシタ、カマラシーラ、ハリパドラらの師資相承からなる学系である。

I. ダルマキールティによる因果同時批判と刹那滅論に立脚した因果異時説 (PVIII246)

ダルマキールティは刹那滅論の観点から因果同時論批判に続いて因果異時説を唱えている。すなわち

PVIII246

asataḥ prāg asāmarthyāt paścād vānupayogataḥ /
prāgbhāvaḥ sarvahetūnām nāto 'rthaḥ svadhiyā saha //⁽⁵⁾

(1) [因果同時論批判] (1-1) [結果の生起する] 前に非存在であるもの (因) には、[結果の生起に関して] 効力がないから、(1-2)あるいは [因に能力があるなら、結果も成立して] 後に [結果を生起するために] 寄与することはないから。(2) [因果異時論] すべての因は [結果の生起の] 前に存在する。このこと故に、対象 (因) はそれ自身に關する知 (結果) と一緒に存在しない。

上の PVIII246 においては前半 ab 句では因果同時論を批判し後半 cd 句では因果異時を立論している。この因果異時論は同、239-245偈⁽⁶⁾において表わされる対象の刹那滅及び意識は感官知を等無間縁として生起することに基づいているから、刹那滅(kṣaṇikatva)に立脚した因果論と考え得る。この PVIII246 が後期中観派の種々のテキストにおいて活用される一方、批判されている実態を明らかにしたい。

II. 後期中観派による PVIII246ab 句 (因果同時批判) の活用と cd 句 (因果異時論) に対する批判

ダルマールティの PVIII246ab 句の因果同時批判が活用され、cd 句の因果異時論に対する批判が表わされている後期中観派のテキストとはシャーンタラクシタの SDP, MAV、カマラシーラの MAP, Māl, SDNS, BhK I である。cd 句の因果異時論に対する批判のみが見いだされるのはジュニャーナガルバの SDV である。因果異時論に対する批判は、SDV *ad* SDK14 におけるアポーハ論に立脚した四種の因果論批判と同様⁽⁷⁾、ダルマキールティ批判を表しており、それはジュニャーナガルバに始まる。他方、シャーンタラクシタの TS、カマラシーラの TSP においては、ab 句の因果同時批判と cd 句の因果異時論とも活用されており、刹那滅論自体が批判されることはないと考えられる。したがって、シャーンタラクシタとカマラシーラとの学説といっても、中観学説自体の立論に先立って仏教内外の諸思想を批判的に吟味することを目的とする TS、TSP とは異なり中観学説自体の立論を目的とするテキストがある。その相違点は上の PVIII246 cd 句 (因果異時論) に対する批判に顕著である⁽⁸⁾。このことに十分留意する必要がある。

冒頭に示した後期中観派の諸のテキストにおける (1) 因果同時批判の活用 (1-1) (1-2) は存在とは能力のあるものであるというダルマキールティの存在論が基盤となっている。(2) 因果異時論に対する批判ではクマーリラによる刹那滅論批判すなわち因の作用 (vyāpāra) を認めず因と果とに間隔がないこと (ānantarya) のみを因果関係の根拠とするなら (Cf 本稿 III-1, TS487=ŚV, VI433)、(2-1) 結果は滅した因から生起するのか、それとも (2-2) 滅していない因から生起するのか、という選択肢による批判方法を導入し、さらにダルマキールティ自身による存在とは能力を有するものという存在論を逆用して、前者であれば、(1-1) と同様、因は無能力であるし、後者ならダルマキールティによる因果同時批判 (1-2) を逆用して、因は有能力であるから、結果も存在し因果同時となるというディレンマによりダルマキールティの刹那滅論に立脚する因果異時論を論難している。これは、ジュニャーナガルバ、シャーンタラクシタ、カマラシーラへと継承される一貫した論述であり、この意味において後期中観派の伝統的立論といい得る。すなわち彼らの学系とは、他学派の学説批判においては、世親による原子や全体 (avayavin) 批判⁽⁹⁾ 及びダルマキールティの刹那滅論を始めとする理論を活用し、他方、中観思想の確立においてはダルマキールティの刹那滅論に立脚する因果異時論やアポーハ論に立脚した因果論をも論難するものである。これらの点は、清弁やチャンドラキールティと異なることは無論、シャーンティデーヴァとも異なることである。

ジュニャーナガルバ、シャーンタラクシタ、カマラシーラに一致する因果異時論に対する批判を確認するために、因果同時批判の活用も含め、論議の全貌を把握する必要がある。そこで最も網羅的であり、かつコンパクトな SDNS のシノプシスと共に他のテキストとの対応を上げ、その理解に供したい。

SDNS における他不生に関する論議のシノプシス⁽¹⁰⁾

1. 常住な因からの生起の否定—PVinII56 (継時的同時的作用がない) による検証⁽¹¹⁾
2. 無常な因からの生起の否定 [Cf. BhK I pp. 200-201では無因に関する吟味の後、有因に関して1., 2.が吟味される。2.1.以下、同様な論議が続く]
 - 2.1. 過去の因からの不生起—説一切有部による過去の異熟因に関して効果的作用の能力を問い退ける Cf. TS513
 - 2.2. 未来の因からの不生起—説一切有部による見解を虚空の蓮華の如しと退ける
 - 2.3. 現在の因からの不生起
 - 2.3.A. ダルマキールティのアポーハ論に基づく因果論 (感官知の生起) に対する批判—四極端の不生起因による無自性論証(Cf. SDV *ad* SDK14, Māl)⁽¹²⁾
 - 2.3.B. ダルマキールティの刹那滅論に立脚する因果論、PVIII246 (ab 句因果同時論批判、cd 句因果異時論) の活用と批判⁽¹³⁾

(1) ab 句因果同時論批判の活用(TS515) [Cf. 本稿II.1.~4.]

(1-1) 果の生起する前に因は無能力であるから果に働きかけない

(1-2) 因は有能力であるとしても同時にある果に働きかけない《ex. 有部の俱有因 TS514》

(2) cd 句因果異時論に対する批判 [Cf. SDV, AŚ14-16、本稿II.1.~4.]

[(2-0) 結果が原因の前に存在するとする場合の否定、Cf Māl 作用を獲得していない未来の因から結果は生起しない]

(ダルマキールティ批判)

(2-1) 因が滅している(=果と間隔がある、断絶している)場合、過去の因は作用しない《ex. 有部の異熟因 TS512》[無因であるから結果は生起しない]

(2-2) 因が滅していない(=果と間隔がない、断絶していない、前後の刹那が接触している)場合 [因は継続するから刹那滅論は崩れる]

(2-2-1) 果と一部として間隔がないなら原子が有部分となるのと同様、刹那⁽¹⁴⁾も有部分となる(原子批判の活用)⁽¹⁵⁾[刹那が最小であることを前提にすれば、この詰問は省略される場合がある]

(2-2-2) 果と全体として間隔がないなら因果同時となり諸原子が一原子の大きさとなるのと同様、カルパも一刹那となる [因と同時にある有なる結果は生起しない]

(3) 因果は間隔がないとしても同時ではない、経量部ヤショミトラの生滅同時論

上のシノプシスの(1-1)(1-2)(2-1)(2-2)と同一内容を表すものが以下のテキストから知られる。したがって、それらから見いだされるものは中観思想の確立の際、刹那滅論に立脚したPVIII246ab 句 (因果同時論批判) の活用及び cd 句 (因果異時論) に対する批判を表す核心理論といえ後期中観派の特徴を顕著に表すものである。

(1) 因果同時論批判は、ダルマキールティのPVIII246abのままであり、(1-1)因果同時なら、

結果が生起する以前に因は無であり能力はないから、因から結果が生起することはない。(1-2)因が存在であって有能力であるとしても、同時に結果も成立しているから、因は結果に対して何も寄与することはないと不合理を指摘する。他方、(2) PVIII246cd 句の因果異時論に対する批判は、それぞれのテキストを対照すると、(2-1)では前後関係にある因と果とが別の刹那によって断ち切られている、すなわち過去の因の場合、滅したものは無であり、能力がないから、因は無因となり不合理である。(2-2)では、因と果とが別の刹那によって断ち切られていない、すなわち滅していない因から結果が生起するなら、因は継続しており因果同時となるという不合理を指摘する。この(2-1)(2-2)は、Māl, SDNS, BhK I pp. 200-201によれば、現在の因からの生起の吟味に配されている。このことから(2-1)滅した因から、あるいは(2-2)滅していない因からの結果の生起を想定した場合のそれぞれの不合理を指摘するディレンマによる PVIII246cd (刹那滅論に立脚した因果異時論) に対する批判であると考えられる。この批判は前述の通りジュニャーナガルバが SDV, AŚ14-16⁽¹⁶⁾で最初に表したものである(Cf 本稿 II-3-2)。さらに(2-1)滅した因からなら、次刹那の結果は無であるからなおさら無なる結果は滅した無能力な因から生起しない。また、(2-2)滅していない因からなら、次刹那においても滅していない因と同時に結果も有である故、有なる結果はさらに生起することはない。したがって、(2-1)(2-2)のディレンマは、原因の側からの矛盾も結果の側からの矛盾も共に指摘しているから同一の事柄の表裏であり、それぞれを別々に論じる必然性はないことになる。結果の側からの論述は因の側からの分析で事足りていると考えられる。したがって、何れか一方の論述でよいことになる。ジュニャーナガルバは因の側からのディレンマ(2-1)(2-2)を含め、SDV(8b1-9a2)には他に、自、他、などに関する四不生、一多何れでもあり得ない点での無自性、縁起である故に無自性、四極端の不生起が表されており、無自性に関する五種の根拠が示されているといえよう。カマラシーラは(2-1)(2-2)は他不生の吟味の際に表し、別立せず、むしろ結果の側からの分析を五種の無自性論証⁽¹⁷⁾の一つとして挙げている。したがって、両者の五種の無自性論証は異なることはなく、この五種の体系化の先鞭をつけたのはジュニャーナガルバであることになる。なお、また以上のことを考慮し PVIII246を分析すれば、因果同時批判(1-1)(1-2)と因果異時(2-1)(2-2)との四種が想定され、ダルマキールティ自身は(2-2)前刹那の因から次刹那に果が生起するという因果異時に立つ。そのダルマキールティによる刹那滅論に立脚した因果異時論(PVIII246cd) に対し(2-1)(2-2)としてジュニャーナガルバはクマーリラによる滅した因、滅していない因という点から刹那滅論に基づく因果論批判を活用して論難した。この点を踏まえシャーキャブツディは四種の分析を立てたものと考えられる⁽¹⁸⁾。

以下で吟味するものは、上の SDNS のシノプシスからいえば、(1-1)(1-2)(2-1)(2-2)に相当する。

II-1 Māl における PVIII246ab (因果同時批判) の活用と cd 句 (因果異時論) に対する批判
II-1-1 Māl P214a6-b2 D195a4-6 (因果同時批判の活用)

現在のもの(因)から[結果が生起する]という主張も[合理的では]ない。というのは、それ(現在存在する他なる因)から結果が正当に生起するなら、(1)同時に、あるいは(2)異時に生起するかの何れかであろう。まず、(1)[原因と結果とが]同時に[生起するのでは]ない。[同時であるなら](1-1)結果が生起する以前に(*prāk*)原因も兎の角のように、無であるから能力(*nus pa, sāmāthyā*)があることは妥当しないからである。(1-2)因の自体が存在としてあって能力がある時に、結果もそれ(因)と同時に存在してまさしく成立している故に、それ(果)に対してそれ(因)は少しも作用(*vyāpāra*)しないからである⁽¹⁹⁾。[因果関係にある両者が同時に存在するとしても、何れかの一方が]原因であると判断することも不合理である。例えば、結果として認められるもの自体は、原因ではないように。さも(両者が区別され)なければ、原因と結果とが入り混じるに他ならないであろう。

II-1-2 Māl P214b2-4, D195a6-b1 (因果異時論に対する批判)

(2)[因果]異時という主張も不[合理]である。というのは、もし結果が[原因]前に存在するなら、そうであれば、(2-0)未来[の原因]からこそ生起するであろう。それも不合理であることは以前に述べ終わっている[Cf. II-1-4]。[以下(2-1)(2-2)ダルマキールティによる PVIII246cd 句(因果異時論)に対する批判](2-1)もし、[因が果の前にあるとしても]別の刹那によって断ち切られた後に(*paścāt*) [結果が生起する]のであれば、そのとき、それ(結果)は過去[の滅した因]からこそ[生起]するであろう。それも不合理であると以前に述べ終わっている[結果は無因となる Cf. II-1-3]。(2-2)もし、[現在の因が果と別の刹那によって]断ち切られていないなら、[(2-2-1)欠](2-2-2)その両者(因果)は全体として断ち切られていないから[因は継続し果と]同時ということになってしまうであろう⁽²⁰⁾。

II-1-3 Māl P212b2-7, D193b4-194a1 [過去の因、例えば説一切有部の提唱する過去の異熟因からの生起はあり得ない]

その場合、まず過去[の因]から[結果が生起する]ということは不合理である。過去のものは無であるからである。それから生起すると認めるなら、これ(結果)は無因ということにもなる。というのは、過去というのは何に対していわれるのであるか。自性からして損なわれたものであるのか、そうでなければ、現在のもののように損なわれていない自体のものであるから、どうして過去のものであろうか。損なわれた自性のもも自性は存在しないから、どうして結果が生起しようか。効果的作用は自性に依存しているからである。

[反論]作用(*byed pa, vyāpāra*)などが滅した(*shig pa, vīnaṣṭa*)ことによって、それは過去のものであるといわれるが、自性(*svabhāva*)が損なわれることによってではない。

[答論] そうであっても、滅した(*shig pa, vīnaṣṭa*)その作用から結果が生起することは不合理である。そうではなく結果が生起するなら、どうして作用は滅していようか。一つの事物に作用することと作用しないこととの二があることも不合理である。[一つのものが]区別されることになってしまうから、また部分は存在しないからである。

II-1-4 Māl P214a1-6, D194b7-195a4 [未来の因、例えば説一切有部の提唱する未来の因が生起されるべき有為法を生起せしめることはあり得ない]

未来のものから [結果が生起すること] もない。それ (未来のもの) も過去のものと同様に無なるものであるから、すなわち自体でないものであるから、未来という場合、虚空の蓮華と類似したそういったものから結果が生起するというのは不合理である。もし、作用を獲得していない故に、それが未来のものであるなら、その場合、それから結果が生起することは、極めて不合理である。作用 (byed pa, vyāpāra) を獲得していないからである。あらゆる事物が常に有 (常住) であるなら、どうして、あるものが、ある時に作用を獲得しないであろうか。それ (作用) を獲得するための諸原因は完全であるからである。作用は事物と別なものとしてもあり得ないということは先に述べ終わっている。[作用と事物とが] 別なものでないなら、[それらに] 区別はないから、作用と同様に自性も獲得されないから、未来のものは有として成立することもないであろう。事物の自性と同様にそれと区別されない作用も常に有 (常住) であるから、[作用は] 常に獲得されないということも成立しないであろう。したがって未来のものは無であるから、それから結果が生起することはない⁽²¹⁾。

II-2 MAV, MAP における PVIII246ab (因果同時批判) の活用と cd 句 (因果異時論) に対する批判

II-2-A-1,2

次のシャーンタラクシタの MAV によれば、自己認識とは因果異時である有形象知と異なり、すなわち知に形象を置く能力をもった因であることが対象の知られる性質であるという知と対象との因果関係にあるものではない。この有形象知は PVIII247を指すと見られる⁽²²⁾。このことにより自己認識は PVIII246cd 句の因果異時でもなく、また ab 句の因果同時としてあるのでもないことを論じている。これは一者である自己認識に所取、能取、認識という三者は矛盾することを表すために、PVIII246ab 句の因果同時批判(1-1) (1-2) を活用していると見ることができよう。この自己認識論は所取、能取、認識すなわち所量、量、量果という三者の区分をもたず一者であるという PVIII353などを表す。なぜなら、PVIII353は、あらゆるダルマは作用 (byed pa vyāpāra) を離れており、知は所量、量、量果という三者の区分を有する有形象知のあり方とは異なることを論じるディグナーガの PSV, 96a3-5⁽²³⁾ に対するダルマキールティの解説であるからである。したがって、シャーンタラクシタは MAV で自己認識の性質を解説する際、PVIII246ab 句 (因果同時論批判) を活用し、またそれは有形象知とは異なるということにおいて結果的に cd 句 (因果異時論) に対する批判を表していることになる。

MAV p. 72, 1-10 ad MAK17 [知の自己認識を証明する際の PVIII246ab 句 (因果同時論批判) の活用]

無部分で単一な自性をもつものに基づくと、三つの自性は妥当しないから、その自己認識は作用するものと作用されるものとの関係としてあるのではない (MAK17)。

例えば、自己の形象を置くことができる対象は原因であり知られるものであって、対象の自性を置かれた知は生起させられたものであり知るものであるという有形象知のあり方に基いて述べられたように自己認識に関して、そのように(知るものと知られるものとして)確立することは妥当しない。無部分な知識に基づく、生起させられるものと生起するものと生起の作用(*bya ba, vyāpāra*)という三つの形態においてあること、あるいは知られるものと知るものと知ることという区別による形態においてあることは不合理であるから、というのは[自己認識が同時に因果関係があるとすれば](1-1)[果が]生起する前には[因は]無であるから無能力であって、(1-2)[因に]能力があるときには生起するものと認められる自性をもつもの(因)と同様、それと区別のない生起されるものと認められる自性をもつもの(果)も成立していて、[因果同時であるから]自らに対する作用は矛盾している⁽²⁴⁾。

この(1-1)(1-2)はPVIII246ab句、因果同時論批判及び先に表わしたMālのそれらとも一到している。

以下のII-2-B-1、2はシャーンタラクシタのMAK60に対するカマラシーラの注釈(MAP)であるが、その内容はダルマキールティのPVIII246ab句(因果同時論批判)の活用とcd句(因果異時論)に対する批判からなり、上のMāl⁽²⁵⁾と一致している。また、それはシャーンタラクシタのMAV *ad* MAK60にも直接表れないものであり、カマラシーラが付随的に論じているものである。そこでのシャーンタラクシタの主張は、形象(*ākāra*)は無であるが、迷乱によって形象は知に顕現するという形象虚偽論⁽²⁶⁾に対して形象と知とは因果性、同一性の必然関係があり得ないという点から論難を表わしている。この点を、さらにカマラシーラは形象と知の間には勝義として刹那滅に立脚した因果関係は成立しないことを論じるのである。その論難の矛先である形象虚偽論とはダルマキールティのPVIII353(217,218,354)などと考え得る。

II-2-B-1 MAP p. 171,4-10 *ad* MAK60因果同時批判(PVIII246ab)の活用

勝義として因果関係自体が妥当しないからである。というのは、まず(1)因果関係は同時ではない。[同時なら](1-1)結果が生起する前に(*prāk*)原因は無である故に、[結果を生起するのに]能力はない(*nus pa med pa, asāmarthya*)からである。(1-2)能力があるときは結果も成立しているから、そのとき、[結果を生起することに]原因は全く寄与すること(*upayoga*)はない⁽²⁷⁾。[因果同時なら]これが結果である、これは原因であるという区別もないから、確立されることの確定もないであろう。

II-2-B-2 MAP pp. 171,10-173,3 *ad* MAK60因果異時論(PVIII246cd)に対する批判

(2)因果は異時でもない。(2-1)別の時間(刹那)によって断ち切られている(*chod pa*)原因から[結果が]生起するなら、滅した(*shig pa, vinaṣṭa*)[過去の因]からこそ生起することが認められたことになろう。滅したものが因としての存在であることも不合理である。滅したものは無であるから、また無もあらゆる能力を離れている特徴のものであるからである

[無因となる]。さもなければ(能力があるなら)、因がどうして滅していか(滅していない)。(2-2) [結果は] 断ち切られていない(ma chod pa) [滅していない因] から[生起] ない。[因果が断ち切られていないなら因は継続し果と] 同時となってしまうからである。部分をもたず断ち切られていない二刹那は同時以外の別なあり方はない。というのは、二なる因果の間(bar, antara)で別の時間を欠いていること自体が断ち切られていない(ma chod pa)ことである。したがって、断ち切られていない前後の二刹那が、どうして相互に接触した時間とならないであろうか、例えば、二原子が間隔なく(bar med pa)存在するなら、必ず、[二原子の] 自性は相互に接触し結合していることになってしまう故、[(2-2-1) 欠] (2-2-2)全体として接触するなら、一塊りのものが原子のみの [大きさと] なるが、同様にカルパも刹那のみとなろう故⁽²⁸⁾、[したがって因果異時ではない。知と形象との間に同一性と因果性との必然関係が存在しないという] 立証因⁽²⁹⁾が疑わしくて成立しないことはない。[したがって因果同時、異時論は成立せず、勝義として因果関係は成立しない。]

II-3 SDV, SDP の因果異時論批判及び SDP における因果同時論批判の活用

以下に表すジュニャーナガルバによる SDV *ad* SDK14の末尾中の AŚ14-16⁽³⁰⁾からは滅した因あるいは滅していない因から結果が生起するなら、何れも不合理であるというディレンマにより因果異時論を断じるものであることが知られ得る。シャーントラクシタの注釈(SDP)からは、さらに PVIII246ab 句、因果同時批判も活用されていると見られる。また、その内容は上で見た Māl, MAP とも一致している。この点から、ジュニャーナガルバによる AŚ14-16は PVIII246cd の刹那滅論に立つ因果異時論を批判するものであると知られる。

II-3-2 SDP33b4-5 因果異時論(PVIII246cd)に対する批判 [II-3-1因果同時論批判の活用が後に来る]

[a. 無常な因の考察]

(2-2)滅していない(ma shig pa) [因] から結果が生起するなら(AŚ14-16a)、(2-2-1)そのとき、[因は] 滅していない(継続している)状態にあるなら、何故、結果は無であろうか(AŚ14-16b)。もし [結果が] 存在するなら、そのとき、結果と原因の二が同時となってしまう。そう(同時)であっても、その [因と果との] 両者の自性が崩れてしまう(因と果とが入り混じる) ことになろう。

(2-1) [因が] 滅してから結果が生起するなら、そのとき、いかなる原因から結果となろうか [無因となる] (AŚ14-16cd)。というのは、まずこの結果が滅した [過去の]⁽³¹⁾因からは生起しない。それ(滅した因)はあらゆる能力(nus pa, sāmāthyā)といわれるものを欠いていることを自性とするからである。

II-3-1 SDP33b5-7 因果同時論批判(PVIII246ab)の活用

(1-2)別の(結果と同時な)因も存在するものではない。その場合でも [因と果とは] 等しくなってしまうからである。したがって、結果はまさしく原因を具えていないこと(無因)

となろう。あるいはまた、(1-1) [因と果とが同時であるなら、結果が生起する前に因は] 無に過ぎないものとなろう。

[b. 常住な因の場合]

もし、自ら随意に不滅(aniruddha)で有なる因から結果が生起するとそう構想するなら、その場合も、因と果とは必ず同時ということになる。(32)

II-4 TS, TSP における PVIII246の活用

クマーリラが TS487=ŚV6-433⁽³³⁾滅していない因の作用(vyāpāra)により結果が生起するという因果論を考えるのに対し、シャーンタラクシタは TS514において俱有因と土用果の場合のように因果同時となると批判する。その際、PVIII246ab の因果同時論批判を TS515で活用している。

II-4-a TS 515

asataḥ prāg asāmarthyāt sāmartye kāryasambhavāt /

kāryakāraṇayoḥ spaṣṭaṃ yaugapadyaṃ virudhyate //

[因と果とが同時に存在している場合、(1-1)結果の生起より] 以前に非存在であるもの(因)には、[結果の生起に関して] 効力がないから、[(1-2)因に] 効力があるとしても、結果が存在しているのであるから、因と果とが同時に存在することは明らかに矛盾する。

また TSP *ad* TS521で因果の肯定的随伴(anvaya)と否定的随伴(vyatireka)を論じているのであるから⁽³⁴⁾、シャーンタラクシタ、カマラシーラによって PVIII246cdの結果の前に原因は存在するという因果異時論もそこでは認められていることになる。他でも以下に示す TSP *ad* TS1989-1991⁽³⁵⁾で世親の Vś14abの原子批判—他の原子との関係をもつ限り原子は有部分となる—により、シュバグプタの BASK46—原子は無部分であっても他の原子により包囲される関係が成立し得る—を論難する際、PVIII246が引かれ刹那滅論に立脚する因果論すなわち因果異時論も肯定されている。そこでは、物質である原子と刹那との相違を示し、前者に前後関係があることは有部分ということであるが、後者の刹那に関しては前後関係(因果異時)があっても無部分であり得ると因果異時論を肯定している。

II-4-b TSP *ad* TS1989-1991

シュバグプタによる原子論への論難の方法として PVIII246は取り入れられている。外界の対象の否定として原子は非存在であるということを証明するのに離一多性因には疑わしさがあるという対論者の指摘に対してシャーンタラクシタは原子の否定を離一多性因により立証し得ることを論じている。それをカマラシーラは TSP で自性因による推論式で表している。さらに現在の心の刹那が無部分であるのと同様、原子が多く原子に包囲されていても、諸原子は無部分であるという、シュバグプタと考えられる論者(非物質的なものと物質である原子とを同様に扱う)による反論に対して、カマラシーラは、ダルマキールティの PVIII246を引用し、すべてのもの(物質的、非物質的なもの)にとって時間的前後関係(因果異時)は無部分

であるが、さらに物質的な原子には空間的前後関係があり有部分であると論じている⁽³⁶⁾。

TSP pp. 678,20-679,15 *ad* TS1989-1991

syād etat yathā varttamānacittakṣaṇa (Bau. lakṣaṇa) syātītānāgatābhyāṃ cittakṣaṇābhyāṃ kālakṛtanairantaryam asti, atha ca na varttamānacittakṣaṇasya kalāmuhūrttādivat sāvayavatvam, evam aṇūnāṃ saty api bahubhiḥ parivāraṇe na deśakṛtaṃ sāvayavatvam bhaviṣyati / tad etad asamyak / na hi varttamānacittakṣaṇasya pūrvottrābhyāṃ nairantaryam paramārthato 'sti, tadānīm tayor asattvāt / na cāsatā saha paurvāparyam bhāvikaṃ yuktaṃ kevalam sahabhūtayor na kāryakāraṇabhāvo 'stīti tadvāreṇa parikalpya samutthāpitaṃ pūrvāparayoḥ kṣaṇayoḥ sattvaṃ prak paścād abhāvavat / na caivam aṇūnāṃ deśakṛtaṃ paurvāparyam parikalpitaṃ pracayābhāvaprasaṅgāt / kiñca na tāvad ahetukatvaṃ bhāvānāṃ yuktimat, nityam sattvādiprasaṅgād iti yo 'pi sāmṃvṛtatvaṃ bhāvānāṃ pratipannaḥ, tenāpy avaśyaṃ sarvabhāvānāṃ sahetukatvam eṣṭavyam / sati ca sahetukatve na tāvat samakāle kāryakāraṇe yukte / nāpi prak kāryotpatteḥ, kāraṇasyāsattvenāsāmarthyāt / paścād api kārye samutpanne hetor anupayogāt / ataḥ prāgbhāvaḥ sarvahetūnām avaśyam aṅgikarttavyaḥ / yathoktam

asataḥ prāgasāmarthyāt paścād cānupayogataḥ /

prāgbhāvaḥ sarvahetūnāṃ nāto 'rthaḥ svadhiyā saha // (PVIII246 本稿 I. 参照)⁽³⁷⁾ iti /
 [反論] 例えば、現在における心の刹那には過去と未来とにおける心の刹那との時間的な間断はない(nairantarya)。また、現在における心の刹那には秒(kalā)や分(muhūrta)などのように部分は存在しない(Cf. BASK51)⁽³⁸⁾。そのように諸原子が多数の[原子]によって包囲されていても、空間的な部分をもつものではないであろう(Cf. BASK46)⁽³⁹⁾。

[答論] そういうことは正しいものではない。なぜなら、現在における心の刹那には勝義としては前と後とにおける[心の刹那との]間断がないこと(結合していること)はない。そのとき、両者(前後における心の刹那)は非存在だからである(Cf. TS1835,1836)。実際には、存在していないものとの前後関係(paurvāparya)は不合理である。同時に生起している二には因果関係は全く存在しないから、そのことから前後の刹那の存在(sattva)を構想して[因果関係は]表わし出されているに過ぎない。前後(の刹那)に存在しないもののように。しかし、そのように諸原子にとっては空間的な前後は構想されたものではない。[さもなくば]集合が存在しないことになるからである。しかもまた、まず諸存在にとって無因は不合理である。[無因であれば]常に存在することなどになってしまうからである。諸存在は世俗的なものであると認める者によっても、必ず全ての存在は原因を有すると認められなくてはならない。また、原因を有することがあるなら、まず、同時にある原因と結果は不合理である(Cf. TS515)。[因果同時であるなら]結果が生起する前に原因は存在しない故、[因

としての] 効力が存在しないからである。後に結果が生起するとしても、[その時、原因も存在して] 原因は寄与しないからである。したがって、あらゆる原因は必ず [結果の] 前に存在することが認められなくてはならない。例えば、以下の通り (ダルマキールティによって) いわれる。

PVIII246 [訳出は本稿 I .参照]

TSPp. 679, 16-24 ad TS1989-1991

tadevaṃ niraṃśatve 'pi sarvabhāvānāṃ nyāyato 'vasthitam kālakṛtam paurvāparyam, deśakṛtam tu katham syād yadi sāvayavatvam na syāt iti codyate / athāsaty api sāvayavatve deśakṛtam paurvāparyam syāt, cittacaittānām api syād aviśeṣād ity uktam / mūrttatvakṛto 'sti viśeṣa iti cen na tad evāsiddham asati sāvayavatve / kevalam paryāyeṇa sāvayavatvam evoktam syāt, nānyo viśeṣa iti yat kiñcid etat / tasmāt sarvabhāvānāṃ nyāyē kālakṛte paurvāparye sati yad etad aparam adhikam kaśyacid deśakṛtam paurvāparyam tat sāvayavatvam antareṇa na sambhavatīti yuktam uktam digbhāgabhedo yasyāsti tasyaikatvam na yujyate (Vś 14ab) ity alam vistareṇa // 1989-1991 //

以上のようにあらゆる存在にとって論理的に確定された時間的な前後関係が部分をもたないとしても、他方、もし、部分を有することがないなら、どうして空間的な [前後関係が] あるろうか、と論難される。

もし、[原子は] 部分を有することがなくても、空間的な前後関係が存在するなら (Cf. BASK46, TSP p. 678, 12-13に引用)、[部分をもたない] 心心所にとっても [空間的な前後関係が] あることになろう (Cf. BASK50)⁽⁴⁰⁾。[無部分なら (Cf. BASK51)、原子と心心所とは区別される] 特殊性がないからであると指摘した。⁽⁴¹⁾

[反論] [原子には] 物質的な特殊性がある。[したがって心心所とは区別される。]

[答論] そうではない。部分を有することが存在しない場合、それ (物質的な特殊性) は不成に他ならない。[物質的な特殊性があるなら] 単に同義語として部分を有するに他ならないといわれたことになろう。[原子に] 別の特殊性は存在しないから、それ (特殊性) は一体何であるか。したがって、あらゆる存在にとって時間的な前後関係が [無部分として] 理屈に適っているなら、それに加えて、あるもの (物質的なもの) に空間的な前後関係があるということは部分を有すること (sāvayavatva) 以外にはあり得ないから、方分の区別が存在するもの (原子) は単一ではあり得ない (Vś14ab) ということが理屈に適ったことであるといふことは詳述する必要はない。

シュバグプタは BASK51, 46で知識の前後二刹那には間隔はないけれども、無部分である。同様に、諸原子が多数の原子によって包囲されていても、空間的な部分をもつことはない主張するから、上の [反論] に等しい。これは物質的な原子は集合し得る限り、部分を有する故、

無部分である原子というものは成立しないと論じる世親への論難を表わしていると考えられる。それに対して、カマラシーラは知識も原子も共に無部分なら、精神的なものと物質的な原子との特殊性としての区別が成立しないことを根拠としてシュバグプタを批判している。逆に物質的な原子に精神的なものと区別し得る特殊性を認め集合を認めるなら、原子は有部分となることを世親の Vś14ab を根拠としてカマラシーラは論難している。すなわち、

無部分なら前後関係が成立しない→構想された前後の刹那に存在するものに基づく因果関係も成立しないから無因となる→諸存在は有因であるから時間的な前後関係が存在する→同時に因果関係は成立しない(PVIII246ab)→刹那滅論に立脚する因果異時説(PVIII246cd)→論理的に確定された時間的な前後関係には部分はないとしても→無部分なら物質的なもの(原子)と精神的なものとを区別する特殊性は成立しない→空間的な前後関係のあるもの(原子)は有部分→Vś 14ab (原子説は成立しない→外界の非存在)

ダルマキールティの経量部説、刹那滅論としての因果論 PVIII246→世親の唯識説に立脚した原子批判 Vś14ab へと展開している。したがって、この TSP においても、外界の対象の実在論から、外界の対象を認識する知、さらに外界の対象の非実在論へという哲学の階梯が導入されていることになる。他方、上で表した通り、SDV, SDP, MAP, Māl, SDNS, BhK I では PVIII246における ab 句(因果同時論批判)は活用されるが、そこでは、とくに MAP, SDNS, BhK I では、前刹那と後刹那とに全体として接触するなら、間隔がないなら一塊のもの(piṅḍa)がただ一つの原子(paramāṇu)だけのものとなってしまうように劫(kalpa)も一刹那だけのものとなってしまうと cd 句(因果異時論)は批判される(Cf. Vś12)⁽⁴²⁾。先の TSP における Vś14ab 及び MAP, SDNS, BhK I における Vś12など世親による原子批判や全体(avaya-vin)批判は広く活用されている。それは、後期中観思想の形成に世親の学説が大きく寄与していることを意味する。

III. クマーリラによる刹那滅論批判の方法と後期中観派の刹那滅論の肯定と批判

III-1. クマーリラによる刹那滅論に立脚した因果異時論に対する批判

クマーリラによる刹那滅論に立脚した因果異時論批判に対する再批判がシャーンタラクシタの TS 因果関係の考察第19章に、及びそのカマラシーラの TSP に見い出される。これは清水公庸氏により和訳と共にクマーリラの ŚV との一致が表わされている⁽⁴³⁾。それに負い TS, TSP におけるクマーリラの刹那滅論批判の方法と他方、それが本稿IIで表したジュニャーナガルバを始めとする後期中観派によるダルマキールティの刹那滅論に基づく因果異時論に対する批判の方法として導入されたと考えられる点を検証したい。

次のものに ŚV からの引用と、それに対する要約がシャーンタラクシタにより表されている。TS483(=ŚV6-431)

na hy alabdhātmakam vastu parāṅgatvāt kalpate /

na vinaṣṭaṃ na ca sthānaṃ tasya kāryakṛtikṣamam //

なぜなら、自体を獲得していないもの（未来の原因）は、他であるもの（結果）のために⁽⁴⁴⁾効力を発揮しない。滅したもの（過去となった原因）も [結果の生起のために効力を発揮し] ない [無因となる]。また、その（滅していない現在の原因）も結果を設ける能力をもつて [結果が生起する時まで] 継続するものではない。

TS484(=ŚV6-428)

pūrvakṣaṇaviṇāṣe ca kalpyamāne niranvaye /⁽⁴⁵⁾

pāścāttvāsyānimittatvād utpattir nopapadyate //

また [原因が] 以前の刹那に滅し（過去となって）後続しないものとして想定されているなら、後のもの（結果）には原因が存在しない [無因である] から、生起はあり得ない。

TS487(=ŚV6-433)

tasmāt prāk kāryaniṣpatter vyāpāro yasya dṛśyate /

tad eva kāraṇaṃ tasya na tv ānantaryamātrakam //

したがって、結果が成立する前に、あるものに作用(vyāpāra)が見られる。それこそがそれ（結果）の原因である。しかし、間隔がないことだけ(ānantaryamātraka) (Cf. TS521)で [因果を確定する根拠なのでは] ない。

これらの TS とクマーリラの ŚV との一致からしてこれらのクマーリラによる見解がシャー
ンタラクシタにより要約されたものが以下のものということになる。

TS488←(TS484=ŚV6-428)

saṃkṣepo 'yaṃ vinaṣṭāc cet kāraṇāt kāryasambhavaḥ /

pradhvastasyānupākhyatvān niṣkāraṇam idaṃ bhavet //

次のものが要約である。何らかの滅した（過去となった）原因から結果が存在するなら、滅したものは目に見えない(anupākhyatva)から、これ（結果）は、無因となろう。

TS489←(TS483=ŚV6-431)

avinaṣṭāc ca tajjātāv anekakṣaṇasambhavāt /

kṣaṇikatvaṃ na bhāvānāṃ vyāhanyeta tadā katham //

また滅していないもの（原因）から、それ（結果）が生起するなら、[結果が生起する時まで] 多刹那の間 [原因は継続して] 存在しているから、その時、どうして諸存在にとって刹那滅(kṣaṇika-tva)であることが損なわれないであろうか。

TSP p. 211, 16-23 ad TS488-489

yathoktam evārthaṃ saṃkṣipyā darśayann āha saṃkṣepo 'yaṃ (TS488a) ityādi / atra dvayī kalpanā vinaṣṭād vā kāraṇāt kāryaṃ bhaved, avinaṣṭād vā naṣṭānaṣṭavinirmuktasya vastuno 'bhāvāt / tatra na tāvad ādyaḥ pakṣaḥ naṣṭasyāsattvena tata utpādābhyupagame kāryasya nirhetukatvaprasaṅgāt / tataś ca nityaṃ sattvādir yujyate /

nāpi dvitīyaḥ anekakṣaṇāvasthāyitvena bhāvānāṃ kṣaṇikatvahānīprasāṅgāt / na katham vyāhanyeteti (TS488b) / vyāhanyata evety arthaḥ / tathā hi bhāvaḥ prathamam tāvad utpadyate, tato vyāpriyate, tataḥ kāryam utpādyā paścād vinaśyati ity evam ekasyaiva vastuno 'nekasmin kṣaṇe sannidhānam iti kṣaṇikatvavyāhātiḥ syāt //

[クマーリラによって] 述べられたままの意味を要約して表す人 (シャーンタラクシタ) が 次のものが要約である云々といったのである。その場合、二つの考えが存在する。結果は滅した因から生起するのか、あるいは滅していない [因から生起するのか] というものである。滅したものの、あるいは滅していないもの以外の事物は存在しないからである。そのうち、まず第一の主張は [妥当] ない。滅してしまったものは [仏教徒にとり] 非存在であるから、それから [結果が] 生起することを承認するなら、結果は無因となってしまうからである。したがって、また [無因から生起するなら] 常に存在することなどとなる。第二のものも [妥当] ない。多くの刹那の間、継続するものとなる故、諸存在は刹那滅であることが損なわれることになってしまうからである。どうして 損なわれないであろうかということは必ず損なわれるという意味である。というのは、存在はまず最初に生起し、それから活動し、それから結果を生起して、その後、滅するという全く同一なものが多くの刹那に [継続して] 存在することになるから刹那滅であることが損なわれることになる。

これらのクマーリラの見解とシャーンタラクシタによる要約から知られることは、結果の前にある原因には作用がなくてはならず、間隔がないことだけ (ānantaryamātraka) で因果関係は成立するのではないということである。このことを論じるのに次のディレンマによって表していることが、まず知られる。間隔がないことだけ (ānantaryamātraka) で因果関係が成立するなら、結果は(1)滅した因から生起するのであるか、あるいは(2)滅していない因から生起するのであるかの何れかである。カマラシーラの注釈からは(1)あるいは(2)以外のあり方はない。(1)の場合、滅したものは目に見えず、無であるから、無因となる。(2)の場合であれば、滅していない因は多刹那にわたって継続することになり刹那滅(kṣaṇikatva)であることが損なわれることになる。(1)の場合も(2)の場合も共に結果が生起することとは矛盾し、刹那滅論に立脚した因果関係は成立し得ないというものである。クマーリラのいう間隔がないことだけ (ānantaryamātraka) というのは、刹那滅(kṣaṇikatva)ということであり、クマーリラ自身は滅していない因の作用により結果が生起すると考えていることになる (TS487=ŚV6-433)⁽⁴⁶⁾。したがって、クマーリラとダルマキールティ、シャーンタラクシタ、カマラシーラとの因果論に関する相違は前者が原因作用説を取るに対し、後者はIII-3で表す通り刹那滅故に原因無作用説を取ることである。

上のクマーリラによる(1)滅した因からなら無因となり、(2)滅していない因からなら因は継続し刹那滅であることが損なわれるというディレンマが、IIで吟味した通り後期中観派のそれと一致しており、それはジュニャーナガルバ(SDV, AŚ14-16)⁽⁴⁷⁾によりダルマキールティの

PVIII246cd 句 (刹那滅に基づく因果異時論) に対する批判として最初に導入されたと考えられる。

III-2.クマーリラによる刹那滅論に立脚した因果論の批判に対するシャーンタラクシタ、カマラシーラの再批判

1. TS, TSP における因果異時論の肯定

クマーリラのディレンマによる論難に対する答弁と、その(1)(2)の論難の方法がジュニャーナガルバラにより活用されていると考えられる点に関して、さらに検討すると、(1)滅した場合であれば、TS513⁽⁴⁸⁾においては説一切有部の提唱する異熟因、異熟果の場合にも相当することがあげられ、それは過去の因として否定される。(2)の滅していない因であれば、TS514⁽⁴⁹⁾において俱有因、士用果の場合にも相当し、因果同時となり、同時に因果関係が成立しないことを TS515⁽⁵⁰⁾で、本稿 I に示したダルマキールティの PVIII246ab 句 (因果同時批判) を活用して論じている。しかし、TS においては、その他の中観思想の確立を目指すテキストとは異なり、PVIII246cd 句 (因果異時論) に対する批判は表されず、むしろ、滅していない因から次刹那に結果が生起するという刹那滅に立脚した因果異時論は肯定されている。なぜなら、原因があれば必ず結果があるという肯定的随伴(anvaya)が作用を意味するということが以下に示す TS521において表され、事実上、因果異時論は肯定されていることになるからである。刹那滅であるから滅していない因の刹那には結果は無である。したがって因果同時の場合、滅していない(有能力な)因から有なる結果はさらに生起することはないとしても、因果異時の場合、前刹那において無なる結果が次刹那に生起することはいい得る。そうすれば、刹那滅論に立脚した因果異時論とは、前刹那において滅していない因が存在している際の無なる結果が次刹那に生起するということである。この有なる結果と無なる結果との生起に関しては先に論じた。

2. 肯定的随伴(anvaya)と否定的随伴(vyatireka)

シャーンタラクシタとカマラシーラとはそれぞれ TS521, TSP *ad* TS522で因果関係を確定するものは因が存在すれば結果が存在するという肯定的随伴(anvaya)と因が存在しなければ結果は存在しないという否定的随伴(vyatireka)⁽⁵¹⁾とであることを言明している。

TS 521

ya ānantaryaniyamaḥ saivāpekṣābhidhiyate /
kāryodaye sadā bhāvo vyāpāraḥ kāraṇasya ca //

[結果が原因と] 間隔がないと確定していることこそが [結果が原因に] 依存することであると、また結果が生起する場合、原因が常に存在していること (肯定的随伴) が作用であるといわれる。

TSP p. 220, 17-18 *ad* TS522

na hy anvayavyatirekābhyām anyañ kāryakāraṇabhāvādhigame 'bhyupāyo 'sti,
なぜなら、肯定的随伴と否定的随伴とは別な因果関係を獲得する方法はない。

上の TS487(=ŚV6-433) [Cf. III-1] におけるクマーリラによる原因であることの根拠は作用を有することであり、因果関係の根拠は間隔がないことのみ(ānantaryamātra)ではないという論難に対して以下に示す TS528及びカマラシーラによるその TSP で刹那滅であるから存在は無作用であると明瞭に答えられ、因果関係の根拠として間隔がないことのみであることは肯定されクマーリラを批判している。これは、前刹那において滅していない因から次刹那に結果が生起するという PVIII246cd (因果異時論) が肯定されることでもある。

3. クマーリラの原因作用説に対する原因無作用説

TS527, 528にはシャータラクシタによる結果が生起するためには原因には作用がなくてはならないとするクマーリラの見解(TS487=ŚV6-433)に対する批判が表わされている。

TS 527

buddher yathā ca janmaiva pramāṇatvaṃ nirudhyate /
tathaiva sarvabhāveṣu tad dhetutvaṃ na kiṃ matam //

例えば、知にとっては生起がまさしくプラマーナとしての性質であると規定される。それと全く同様にすべての存在に関して、[作用は存在せず] それ(生起)が原因であると考えないのであるか。

TS 528

kṣaṇikā hi yathā buddhis tathāivānye 'pi janminañ /
sādhitās tadvad evāto nirvyāpāram idaṃ jagat //

例えば、知が刹那滅であるそれと全く同様に他の諸の存在(種子など)も[刹那滅である]と証明された通りである。それ故に、この世界の存在は作用を離れたもの(nirvyāpāra)である⁽⁵²⁾。

この点は、さらにカマラシーラの TSP pp. 223, 24-224, 10 ad TS528における推論式に明らかである。

prayogaḥ ye kṣaṇikās te janmātiriktavyāpāraśūnyāḥ, yathā buddhiḥ / kṣaṇikās ca
bijādayaḥ pūrvam prasādhitā iti svabhāvahetuḥ / paścād avasthityabhāvena nirādhār-
avyāpārāyogo bādhakaṃ pramāṇam / tasmād ānantaryamātram eva kāryakāraṇa-
hāvavyavasthānibandhanam, na vyāpāra iti sthitam etat //

諸の刹那的存在であるものは生起とは別な作用をもたない。例えば、知識のように。(遍充関係)

種子などが刹那的存在であることは以前に証明されている。(論理的根拠)

[種子などは生起とは別な作用をもたない。(結論)]

以上の[推論]は同一性の因(svabhāvahetu)に基づくものである。後に留まることがない

故に基体の存在しないものに作用は不合理であるということが拒斥の検証(bādhakam pramāṇam)である。したがって、間隔がないことのみ(ānantaryamātra)が因果関係を確定する根拠であるが、作用(vyāpāra)が[因果関係を確定する根拠なのではない]ということが証明された。

以上からクマーリラの TS487(=ŚV6-433)における因には作用が存在するという言明は、因は無作用であるという刹那滅論に対する批判であることになる。なお、刹那滅論に立脚し因は無作用であることとは、世親、ディグナーガ⁽⁵³⁾、またダルマキールティ⁽⁵⁴⁾も主張するところである。

III-3. クマーリラのディグナーガ批判

ではクマーリラはいかなる論師の刹那滅論に基づく因果異時論を批判しているのでしょうか。ダルマキールティはクマーリラの ŚV を知っていたとされるから⁽⁵⁵⁾、それはダルマキールティではないことになる。それは、ディグナーガであると考えられる。アポーハ論や直接知覚論に関して⁽⁵⁶⁾、クマーリラがディグナーガを批判していることは知られている。この刹那滅論に基づく因果異時論に関しても同様なことがいい得ることを検証したい。それは、同じく TS において見出し得る。それは先の TS487(=ŚV6-433) で、結果の前にある原因には作用がなくはならず、間隔がないことだけ(ānantaryamātraka)で因果関係は成立するのではないと原因作用論を以って刹那滅論に基づく因果異時論を批判していたクマーリラに対する先のシャータラクシタ、カマラシーラによる答弁(TS528)すなわち「刹那滅故に存在は無作用である」という主張を遡源することにより知られ得ると思われる。

クマーリラによる原因作用論は、さらに次のカマラシーラの TSP には、BBS の TS、TSP テキストの編者である S. D. SHASTRI によって同定されている通りミーマンサスートラ1-1-4の解釈を巡って ŚV 直接知覚章からの引用が上げられ、カマラシーラはクマーリラの直接知覚論と因果論、原因有作用論とを関連させ取り上げている。この点に関して検討したい。それは、次のものである。

TSP p. 223,13 *ad* TS 527

satsamprayoge puruṣasyendriyāṇām buddhijanma tat pratyakṣam (MĪ SŪ 1.1.4)

人の感官が正しく結合するとき、人に知が生起する。それが直接知覚である。

TSP p. 223,15-17 *ad* TS 527

buddhijanmeti ca prāha jāyamānapramāṇatām /

vyāpāraḥ kāraṇānām⁽⁵⁷⁾ hi dṛṣṭo janmātirekataḥ /

pramāṇe 'pi tathā mā bhūd iti janma vivakṣyate // (=ŚV4-53cd,54, cāpy āha)

また知の生起とは生起することがプラマーナであることをいっている。なぜなら、諸原因には生起とは別に作用(vyāpāra)が見られる。同様に、プラマーナもそうであってはならないから生起が述べられようとしている。

このクマーリラの見解は原因の生起の場合とプラマーナの生起の場合とを峻別し、前者の場合には生起とは別に作用があるが、後者の場合には生起のみであって作用はないということである。プラマーナに関しては無作用であるということは、クマーリラがプラマーナに関しては刹那滅論に立っていることから知られる。すなわち、

TSP p. 223, 20-21 *ad* TS528

buddher vyāpāro bhāvo yuktaḥ, na hi sottarakālam avatiṣṭhate kṣaṇikatvāt

知にとっては存在が作用であることが妥当する [存在自体が作用であるから存在とは別に作用はない]。なぜなら [知の存在] は後の時にわたって留まらない。刹那性の故に。

これはすでに清水氏により指摘される通り次のクマーリラの見解を表わすと考えられる⁽⁵⁸⁾。

na hi tat kṣaṇikam apy āste (ŚV4-55a)

それ(プラマーナ)は一刹那も留まらない。

他方、因に関しては作用がなくてはならないということはIII-1で表わしたTS487(=ŚV6-433)におけるクマーリラの論難と一致している。それは原因には作用がなくてはならず、間隔がないこと(刹那滅)だけが因果関係を確定する根拠ではないというものである。この論難にはシャーンタラクシタはTS528で、プラマーナに関してと因に関してとクマーリラのように峻別することはなく、すべての存在は刹那滅であるから、すべての存在には作用はないと答えていた。したがって、クマーリラの原因有作用論とシャーンタラクシタ、カマラシーラの原因無作用論との応酬が知られる。それと共にクマーリラは原因有作用論によって〈刹那滅であるから原因もプラマーナも共に作用はないと主張する論者の見解〉を批判していると知られる。それをディグナーガの見解であると考えた根拠は次のものである。

PSV, 95b5-7⁽⁵⁹⁾

この場合も、作用を具えていると想定されるから、プラマーナは(量)果そのものである(k. 8cd)。外道達のようにプラマーナとは別のものとして(量)果はないが、(量)果であるその知が対象の形象をもって生起し、また作用をもっているという想定に依存してプラマーナに他ならないと仮に述べられる。作用は存在しない。例えば、結果が原因にしたがって生起する場合、原因の色形を捉えるといわれる。作用は存在しない。この場合も同様である。

PSV, 96a3-5⁽⁶⁰⁾

そのように、多なる形象を知覚する知が比喩表現として、例えばプラマーナとプラメーヤといい表される。あらゆる存在は作用(*byed pa, vyāpāra*)を離れているからである。次のことがまさしくいわれる。顕現したものがプラメーヤであり、把握された形象と認識とがプラマーナとその結果とである。それ故に、その三つのもは区別されない(k. 10)。

このディグナーガのプラマーナも因も作用を有するものではないという見解は、ダルマキールティによってもその注釈(PVIII307-309)において表されている。

dadhānaṃ tac ca tām ātmany arthādhigamanātmanā // (307cd)

savyāpāram iv'ābhāti vyāpāreṇa svakarmaṇi /
tadvaśāt tadvyavasthānād akāarakam api svayam // (308)⁽⁶¹⁾

それ(対象の形象)を自らにおいて受取っているそれ(知)は、対象の認識を自体とする作用によって自己の対象について作用をもっているかのように現われる。自ら行為をするものではなくとも、それ(対象の形象)からそれ(認識)が確定するからである。

以上からクマーリラは TS487(=ŚV6-433)の因の作用説によってディグナーガのプラマーナも因も無作用であるという刹那滅論に基づく因果異時論を論難していることになる。それは、さらに滅した因からか、滅していない因からかに始まるディレンマにより論難している。それに対し、ダルマキールティは滅した因は無能力であるから結果は生起することはなく、滅していない因からであれば、因果同時ということになると論難する。すなわちそれに対して PVIII246ab 句で因果同時批判が表され、cd 句の因果異時論によりクマーリラの批判に答えられたことになる。このダルマキールティによる因果同時批判によってシャータラクシタは TS515⁽⁶²⁾でクマーリラを批判している。ジュニャーナガルバは SDV で滅した因からか、滅していない因からかによるクマーリラのディグナーガ批判の方法をダルマキールティの PVIII 246cd 句の因果異時論批判に適用しダルマキールティ批判を表したといえよう。これがシャータラクシタ、カマラシーラによって継承され、一切法無自性論証の体系が、さらに詳述されることになった。上に示したクマーリラの主張(ŚV4-53cd,54)はディグナーガの直接知覚論(PS, k. 6, 10)に対する批判であるとされている。したがって、クマーリラによる刹那滅論に立脚した因果異時論としての特に因の無作用論に関する批判はディグナーガに向けられたものであると考えられる。そのクマーリラによる詰問にシャータラクシタとカマラシーラとは、それぞれ上の TS528とその TSP でディグナーガ、ダルマキールティに順じて刹那滅であるが故に原因は無作用であると答えていることになる。他方、クマーリラによる因果異時論批判はヤショミトラに向けられた面もある。なぜならクマーリラは TS485=ŚV6-430でヤショミトラの竿秤の上下を喩例とする生滅同時論に関し、その場合因と果とが相互に依存し合うことがないことを根拠に因果関係の不成立を指摘しているからである⁽⁶³⁾。

IV. 後期中観派による刹那滅論証

一反所証拒斥検証、帰謬、帰謬還元法—

後期中観派により無常な因からの不生を論じるのに PVIII246 が活用されるに対し、常住な因からの不生を論じる際にはダルマキールティの PVinII56における刹那滅論が活用されている。

arthakriyāsamarthaṃ yat tad atra paramārthasat /
asanto 'kṣaṇikās tasmāt kramākramavirodhataḥ //

結果を設ける能力のあるものが勝義としての存在である。したがって、刹那滅でないものは

存在ではない。継時的同時的 [に結果を設けることと] 矛盾するからである。

これと同様にダルマキールティは HB19*11-13でも主張し、
 śaktir hi bhāvalakṣaṇam, sarvaśaktiviraho 'bhāvalakṣaṇam. na cākṣaṇikasya kvacit
 kācic chaktiḥ, kramayaugapadyābhyām arthakriyāvīrahāt. tasmād yat sat tat kṣa-
 ṇikam eveti vyāptisiddhiḥ.

なぜなら、存在の特徴は能力である [肯定的遍充]。あらゆる能力を離れているものは無存在を特徴とするものである [否定的遍充]。また、(宗) 刹那的でないものには何らの能力も決してありはしない [無存在である]。(因) [刹那的でないものは] 継時的同時的に効果的作用を欠いているからである。したがって、存在するもの (立証因) はまさしく刹那的なもの (所証) であるから遍充関係が成立する。

それは以下のものにも導入されている。すなわち、シャーンタラクシタの VNV, TS1837, MAV *ad* MAK8、カマラシーラの TSP *ad* TS16,41,347,395-416,1837, Māl P211b6-7, D193a3, SDNS p. 79, BhK I p. 201などである。取り分け反所証拒斥検証を用いた刹那滅論証は次のものである。

VNV p. 12,25-28⁽⁶⁴⁾

yasya kramayaugapadyābhyām arthakriyāyogaḥ tasya sāmartyhalakṣaṇam sattvaṃ
 nāsti / yathā bandhyātanayādīnām, tathā vākṣaṇikānām api kramayaugapadyābhyām
 arthakriyā 'yoga iti kramākramābhyām arthakriyā 'yogād ity ayaṃ vyāpakānupalam-
 bhaḥ / sattvād ity asya hetor viruddham asattvaṃ sādhyaviparyaye pratyupasth-
 āpayad bādhakaṃ pramāṇam ucyate /

継時的同時的に効果的作用をなし得ないものは、効力の特徴を有する存在ではない。例えば、石女の息子などのように。(論理的必然性)

刹那的でないものも、継時的同時的に効果的作用をなし得ない。(論理的根拠)

[刹那的でないものは、効力の特徴を有する存在ではない。(結論)]

以上の [推論] は能遍の無知覚に基づくものである。存在であるからという立証因と対立するものである存在でないことが反所証 (刹那滅でないもの) において明らかになることが拒斥検証であるといわれる。

TSP p. 627,14-19 *ad* TS1833

kiñ ca na kevalaṃ siddhāntavirodhaḥ, anumānavirodho 'pi pratijñāyāḥ / tathā hi yat
 sat tat sarvaṃ kṣaṇikam, yathā vartamānam / santaś cātītānāgatā iti niyamāt kṣaṇa-
 bhaṅginaḥ prāptāḥ / prāk tu kṣaṇabhaṅgādhiḥkāre / pratibandho 'sya hetoḥ prasādhita
 iti nānaikāntikatvam / tathā hi arthakriyākāritvaṃ sattvalakṣaṇam, akṣaṇikasya ca
 kramayaugapadyābhyām arthakriyāvīrodhād arthakriyānivṛtttau tallakṣaṇasya sattva-
 sya nivṛttir iti sādhyavipakṣān nivṛttaṃ sattvaṃ //

また、単に学説との矛盾だけではない。主張命題には推理との矛盾も存在する。というのは、(大前提) 存在するものは全て刹那的なものである。例えば、現在のもののように。(小前提) また、過去と未来とのものは存在するものであるから。(結論) 必ず過去と未来とのものは刹那滅である。一方、刹那滅章においてその因(存在するもの)の[所証(刹那的なもの)との]必然的關係は証明されているから不定因ではない。というのは、存在の特徴は効果的作用をなすことである。また(因)刹那的でないものには継時的同時的という点から効果的作用と対立することがあるからである。(宗)[刹那的でないものに]効果的作用が否定される場合、その特徴(効果的作用)をもつものである存在は否定される、[(喩)継時的同時的効果的作用のないものは効果的作用を有する存在ではない。]というのは、存在であること(立証因)が所証と反対のもの(刹那的でないもの)から排除されることである[反所証拒斥検証、刹那的でないものは存在ではない、すなわち存在であるものは刹那滅である]。シャーンタラクシタは上の VNV で、カマラシーラは直前の TSP で遍充関係を確定するために反所証拒斥検証によって実在と認められない過去と未来とのものや刹那滅でないものを主題とした推論を設けている。これらはラトナキールティのものと全く同様である。一方、帰謬は論理的根拠(小前提)に対論者の主張を仮言的に採用し、結論は立論者、対論者にとって共に誤りである故、インド論理学の伝統からは正当な推論とは認められない二次的なものである。そこで正当な論証を立てるべく帰謬から帰謬還元法が考案されたのである。シャーンタラクシタ、カマラシーラによる帰謬、帰謬還元法を用いた刹那滅論証は以下のものである⁽⁶⁵⁾。

(1) TS1834

arthakriyāsamarthāḥ syur atītānāgatā ime /
na vā sāmārthyasadbhāve varttamānās tadanyavat //

これらの過去と未来とのものは効果的作用の効力があるか、ないかであろう。効力が存在しているなら(論理的根拠)、[過去と未来とのものは]現在のものとなろう(結論)。それとは別のもののように(喩)。^[帰謬法]

(2) TS1835

avartamānatāyāṃ tu sarvaśaktiviyoginaḥ /
naṣṭājātāḥ prasajyante vyomatāmarasādivat //

他方、滅した(過去の)ものと生起していない(未来の)ものとが現在のものでないなら(論理的根拠)、[過去と未来とのものは]あらゆる能力を欠いているものになってしまう(結論)。虚空で日中に咲く蓮華(tāmarasa)などのように(喩)。^[帰謬還元法]

シャーンタラクシタによる上の(1)(2)の推論は、それぞれカマラシーラによって以下の(1a)(2a)の推論式で表わされている。

TSP pp. 627, 22-628, 14 *ad* TS1834-1835

(1a) prayogaḥ ye 'rthakriyāsamarthās te varttamānāḥ, yathā 'vivādāspadibhūtā var-

ttamānāḥ / arthakriyāsamarthāś cātītādaya iti svabhāvahetuprasaṅgaḥ / na cāyam
anaikāntikaḥ ; yato vartamānatvanivṛttau naṣṭājātānām sarvasāmarthyaviyogitvaṃ pra-
sajyeta, ākāśāmbhoruhavat / (2a) prayogaḥ ye varttamānā na bhavanti te kvacit
samarthā api na bhavanti, yathā vyomāmbhoruham / na bhavanti cātītādayo var-
ttamānā iti vyāpākānupalabdhiḥ /

(1a) 推論式で表せば、

効果的作用の効力を有するものは現在のものである。例えば、議論の主題となっていない現
在のもののように。(遍充関係)

また過去のものなどは効果的作用の効力を有するものである。(論理的根拠)

[過去のものなどは現在のものである。(結論)]

以上の [推論は] 同一性を根拠とする帰謬である。

この [因] は不定ではない。なぜかといえば、現在性を否定するなら、滅したものと生起し
ていないものはあらゆる効力を欠いているものとなろう。虚空の蓮華のように。

(2a) 推論式で表せば、

現在のものでないものは決して効力をもたない。例えば、

虚空の蓮華のように。(遍充関係)

また過去のものなどは現在のものではない。(論理的根拠)

[過去のものなどは決して効力をもたない。(結論)]

以上の [推論] は能遍の無知覚 [因に基づく帰謬還元法] である。

(2a)が(1a)の帰謬に対する帰謬還元法であることは、(1a)の結論の換質命題を論理的根拠
とし、(1a)の論理的根拠の換質命題を結論としているからである。これら注釈の元であるシ
ャーンタラクシタによる(2)が(1)の帰謬に対する帰謬還元法であるといい得る。したがって、
シャーンタラクシタもカマラシーラも帰謬の欠陥を十分に意識し、それを帰謬還元法によつて、
その欠陥を克服しようとしている故、刹那滅論に関する帰謬を帰謬還元法によつて根拠づけて
いるといい得よう。シャーンタラクシタはダルマキールティのVNに対する注釈VNVで刹
那滅に関する遍充関係を反所証拒斥検証により証明し、カマラシーラは、上のTS1833の注釈
箇所の後半で反所証拒斥検証により刹那滅論の遍充関係を証明していた。その際、主題は実在
するものではなく喩例も用いられておらず、遍充関係の成立が主題自体において捉えられよう
としている⁽⁶⁶⁾。したがって、カマラシーラによるその推論は実質的には内遍充論と見ることが
できる。これらの点は後代の内遍充論者であるラトナーカラシャーンティや外遍充論者であ
るラトナキールティの刹那滅論と異なるところはなく、彼らに先立って刹那滅論を考案して
いる。すなわち、シャーンタラクシタもカマラシーラも共に刹那滅の論証において実在ではな
い主題に関し反所証拒斥検証により遍充関係の成立を表わし、帰謬を帰謬還元法によつて根拠
づけていることが知られる。

結論

- 1.ダルマキールティのPVIII246は後期中観派により広く取り上げられジュニャーナガルバにより同246cd句、刹那滅論に立脚した因果異時論は滅した因からなら無因となり、滅していない因からなら因は継続し因果同時となり刹那滅であることが損なわれるというディレンマにより批判されている(SDV, AŚ14-16)。これはクマーリラによるヤショミトラとディグナーガとの刹那滅論に立脚した因果異時論に対する批判に基づいて考案されたものと考えられる。シャーンタラクシタのSDPでは、同246ab句における因果同時批判も活用されている。このことはカマラシーラのMAP, Māl, SDNS, BhK Iでも同様である。Māl, SDNS, BhK Iでは四(自、他、自他の二、無因)不生の立証因のうち他である無常な因からの不生を論じる際、取り上げられるものである。常住な因からの不生はPVinII56に基づいて論じられる。他方、シャーンタラクシタのTS、カマラシーラのTSPでは、上記の諸のテキストの場合とは異なり、有部の俱有因の場合のように因果同時論の論難に際してはPVIII246 ab句の同時論批判が活用されるのは他のテキストと同様であるが、クマーリラの批判に対しての答論ではcd句の因果異時論は活用されこそすれ批判されることはない。
- 2.ジュニャーナガルバによる上の滅した因あるいは滅していない因に関する吟味は、有なる果と無なる果との不生起の吟味と同一の事柄の表裏であり別々ではない。したがって、ジュニャーナガルバにより五種の無自性論証全ての萌芽が表され、シャーンタラクシタのSDPを経てカマラシーラがMālで継承したものである。
- 3.カマラシーラのTSPも、外界の対象を否定するのに、説一切有部とされるシュバグプタの原子論(BASK46)をダルマキールティの刹那滅論に基づく因果論(PVIII246)を活用し無部分であっても前後の刹那の関係(因果関係)はあり得ることを論じる典拠としている。他方、物質である諸原子の集合は部分なくしてあり得ないことを世親のVś14abによりそれを裏付けている。しかしTS, TSP以外のテキストにおいては刹那の結合と原子の結合とを同一の方法により、すなわち一部分としてなら有部分となり、全体としてなら一塊のものとなると論難する。
- 4.後期中観派により刹那滅論の論証にTS, TSPでは帰謬、帰謬還元法、反所証拒斥検証を用いていることが知られる。

〔略号〕

- AAA: Haribhadra, *Abhisamayālaṅkārahālokā Prajñāpāramitāvyākhyā* ed. U. Wogihara, 1973
AKBh: Vasubandhu, *Abhidharmakośabhāṣya*, ed. by Prodhān, 1967
AKV: Yaśomitra, *Abhidharmakośavyākhyā*, ed. by U. Wogihara, 1971. Rep.
Bhk I: Kamalaśīla, *Bhāvanākrama*, Minor Buddhist Texts part I, II ed. by G. Tucci 1978
Rinsen Book Company Kyoto
HB: Dharmakīrti, *Hetubindu*, ed. by E. Steinkellner, Teil I, Tibetischer Text und rekonstruierter Sanskrit-Text, Wien 1967

- MAK, MAV, MAP: Śāntarakṣita, *Madhyamakālamkārikā*, -vṛtti, Kamalaśīla, MA-*pañjikā*
ed. by M. Ichigo
Māl: Kamalaśīla, *Madhyamakāloka*, P.No. 5287, D.No. 3887.
PPT: Kamalaśīla, *Prajñāpāramitāvajracchedikāṭīkā*, P.No. 5216, D.No. 3817
PS, PSV: Dignāga: *Pramāṇasamuccaya*, -vṛtti, chap. I, Hattori M. (1968) Dignāga, On Perception
PV: Dharmakīrti, *Pramāṇavārttika*, 戸崎 (1979)
PVin: Dharmakīrti, *Pramāṇaviniścaya*, ed. tib. II. svārthānumāna: Steinkellner (1973).
VNV: Śāntarakṣita, *Vādanyāvṛttivipañcitārtha*, ed by S. D. Shastri. Varanasi, 1972.
SDNS: Kamalaśīla, *Sarvadharmāṇiṣvabhāvasiddhi*, 森山 (1981) (1982)
SDK, SDV, SDP: Jñānagarbha, *Satyadvayavibhaṅgākārikā*, D.No. 3881 -vṛtti, D.No. 3882 Śāntarakṣita, SD -*pañjikā* P.No. 5283, D.No. 3883
TS, TSP: TATTVASAṄGRAHA, ed. by S. D. SHASTRI, Bauddha Bharati Series-1(1968), D. No. 4267
ŚV: Kumārila, *Ślokaṅvārttika*, ed. by S. D. Śāstri, Prāchyabhārati Series-10 (1978)

〔参照論文〕

- 江島惠教(1980)『中観思想の展開—Bhāvaviveka 研究—』春秋社
桂 紹隆(1983)ダルマキールティの因果論、南都佛教第50号
G. JHA(1986) The Tattvasaṅgraha of Śāntarakṣita with the Commentary of Kamaraśīla Vol. II English Translation, Reprint.
菅沼 晃(1985)『撰真実論』外境批判章訳註(二) 壬生台舜博士頌寿記念仏教の歴史と思想
清水公庸(1983)因果をめぐる論争 TSP. Karmaphalasambandhapariṅśā” 試訳、南都佛教第51号
谷 貞志(2000)『刹那滅の研究』春秋社
戸崎宏正(1979)『仏教認識論の研究』上巻、大東出版社／(1985)『仏教認識論の研究』下巻、大東出版社／(1991)JS1.1.4の意趣と各語の意味—クマールラ著『シュローカヴァールティカ』第4章(知覚—ストラ)の和訳(1)—／
Hattori(1968)Cf. [略号] PS, PSV／服部正明(1973)Mīmāṃsāślokaṅvārttika, Apohavāda 章の研究(上)、京都大学文学部研究紀要第14号
松本史朗(1981a)佛教論理学派の二諦説(中)、南都佛教第46号／(1981b)佛教論理学派の二諦説(下)、南都佛教第47号
神子上恵生(1986)シュバグプタの Bahyārthasiddhikārikā、龍谷大学論集第429号
御牧克己(1972)初期唯識諸論書に於ける Sautrāntika 説、東方学第43号／(1984)刹那滅論証『講座・大乘仏教9—認識論と論理学』春秋社
森山清徹(1981)カマラシーラの Sarvadharmāṇiṣvabhāvasiddhi の和訳研究(1)、佛教大学大学院紀要第9号／(1982)カマラシーラの Sarvadharmāṇiṣvabhāvasiddhi の和訳研究(2)、佛教大学大学院紀要第10号／(1989)後期中観派の学系とダルマキールティの因果論、佛教大学研究紀要通巻73号／(1994)中観派と経量部の因果論論争—竿秤の上下(tulādaṇḍanāmonnāma)の喩例を巡って—、印佛研究 No. 43-1／(1995)Kamalaśīla による〈他不生〉の論証方法と経量部の因果論—因果同時、異時説の論破—佛教大学文学部論集第79号／(1996)カマラシーラの他不生の論証とダルマキールティの刹那滅論—ヤシヨミトラとウッディョータカラとの論争の経緯—、印佛研究 No. 45-1／(1997)無自性論における遍充関係と二諦説—帰謬還元法と反所証拒斥検証—、南都佛教第74・75号／(2000)カマラシーラの自立論証としての無自性論証とダルマキールティの推理論—*Madhyamakāloka* 和訳研究—、戸崎宏正博士古稀記念論文集『インドの文化と論理』／(2003)シャーントラクシタの中観思想の形成とシュバグプタ、シャーキャブッディ—自然界(原子、物質)と知識の峻別の根拠—、佛教大学総合研究所紀要 第10号／(2005)後期中観派による四極端

の生起の論破とダルマキールティの因果論(下) — *Madhyamakāloka* 和訳研究一、佛教学部『文学部論集』第89号/(2011)シャーンタラクシタの *Vādanyāvṛttivipañcitārtha* とカマラシーラの無自性論証—ダルマキールティの『量評釈自注』(PVSV)を巡って一、佛教学部論集』第95号/(2015)世親の『俱舍論』『唯識二十論』とニヤーヤ学派(ヴァーツヤヤナ、ウッディヨータカラ) — 全体および原子の結合論一、小澤憲珠名誉教授頌寿記念論集『大乘仏教と浄土教』/(2016)世親、ヤショミトラとニヤーヤ学派(ヴァーツヤヤナ、ウッディヨータカラ) — 刹那滅論に立脚した直接知覚論と因果論との成立の問題一、三友健容博士古稀記念論文集『智慧のともしび アビダルマ佛教の展開』

山崎次彦(1964)クマーリラのディグナーガ直接知覚論批判、三重県立大学研究年報第1部第IV巻第4号

〔注〕

- (1) 森山(1981)(1982)(1995) (2) 森山(1995)pp. 43-44、III (3) 森山(2000)p. 482, 121) (4) 森山(2005) (5) 御牧(1972)p. 83, 55), 戸崎(1979)p. 344 (6) 戸崎(1979)pp. 340-344 (7) 森山(2005) (8) 他にも対比的な論述を上げれば、因果関係は直接知覚と無知覚によって成立するというダルマキールティの理論はSDV *ad* SDK13では、直接知覚としての有形象知、無形象知によって対象は把握されないということ、また無知覚は本質的には直接知覚であるということ根拠に否定される[森山(1989)pp. 10-14]。また因果関係が直接知覚と無知覚とによって成立しないということ刹那滅を根拠に論難するものは、TS491の前主張においても見られるが、以下のTS後主張では、肯定的に受容され、刹那滅に立脚する因果異時論も肯定されている。これらの点に関しても中観思想の確立を目指す論書とは立論内容が異なる。 TS532 *bhāvābhāvāvimau siddhau pratyakṣānupalambhataḥ / yadi sākāravijñānavijneyaṃ vastu vo matam //* この存在と非存在との二は直接知覚と無知覚によって成立する。もし、汝らには事物は有形象知によって知られなくてはならないと考えるなら、 TS533 *athā 'nākāradhīvedyaṃ vastu yuṣmābhir iṣyate / tat kṣaṇatvādīpakṣe 'pi samānam upalabhyate //* もし、汝らによって事物は無形象知により知られなくてはならないと望むなら、それ(事物)は刹那滅などの場合であっても等しく認識される。 TS534 *pūrvakebhyaḥ svahetubhyo vijñānaṃ sarvam eva hi / samānakālarūpādi bodharūpaṃ prajāyate //* 同時に存在する色などを知の本質としてもつあらゆる知は前の諸の自己の因からこそ生起する。(9) Cf. 森山(2015) (10) このSDNSのシノプシスの内容は全てに亘ってMālと一致する。その一致部分は森山(1981)(1982)の脚注に表している。(11) Cf. 森山(1995)pp. 44-46 (12) 森山(1989)(2005) (13) 本稿で扱うテキスト以外にもカマラシーラのPPT『金剛般若経の注釈』の中にも同様な吟味が見出される。シノプシスはPPTと対照して作成した。森山(1994)pp. 152-153 (14) ヤショミトラも刹那が時間の極限であることを表している。森山(1996)p.(181) (15) このシノプシスの全容から、他不生を論じるのに説一切有部の異熟因、俱有因さらに経量部ヤショミトラの生滅同時論、ダルマキールティの因果異時論を批判的に吟味し、世親の『唯識二十論』における原子批判を前刹那と後刹那との結合(接触)に適用し退け刹那滅論に立脚する因果論の不合理を論じていることが知られる。そして他生起も言語習慣(vyavahāra)であり勝義としては他不生であると導く[Cf. 森山(1995)p.53]。そこには諸哲学の段階的な超越の構造が見て取れる。(16) Mālに引用されている。Cf. 森山(1995)p. 52 (17) カマラシーラによる五種の無自性論証 Cf. 江島(1980)pp. 242-243 (18) シャーキャブッディによる四種の分析は松本(1981a)p. 40下段(a)-(d)、また同、pp. 39-40にはシャーキャブッディが批判したのはジュニャーナガルバであると考えられることが示されている。ではジュニャーナガルバは、いかなる論者の学説を滅した因、滅していない因という点から論難しているかについては言及されない。(19) Cf. TS515 (本稿II-4-a) (20) P214b4, D195b1以下、シャーキャブッディによる反論とカマラシーラの答論、松本(1981)p. 45上段に訳出、解説される。(21) これは、前刹那の因と次刹那の果との関係すなわち刹那滅論においては原因は作用を有しな

いとすのディグナーガの見解を批判するクマーリラによる原因であるためには作用がなくてはならないとする見地を TS528, その TSP では (Cf. 本稿III-2)、刹那滅論に立ち原因は無作用であると主張していたのであるが、上の Māl では刹那滅論に立つ因果論を論破するのに、未来の因は作用を有しないと否定している。この場合は未来の因に作用のないことを根拠としている。これは、未来、過去、現在の因を想定し、それぞれが無作用であることを根拠に成り立たないことを論じるクマーリラの方法 (Cf. TS483=ŚV6-431) を取り入れていると考えられる。(22) MAV p. 72fn. (1)に指摘される。(23) Hattori(1968) pp. 183-185, 戸崎(1985) p. 40fn. (2) 本稿III-3 Cf. 本文、注(60)の部分 (24) Cf. PVIII246, 308ab (25) Cf. 本稿II-1 (26) Cf. PVIII217, 218, 354 (27) Cf. TS515 (28) SDP, Māl では同時となるとする Cf. SDNS, BhK (29) この立証因とは次の推論における〈知との同一性と因果性との特徴からなる二種の必然関係は存在しない〉を指すと考えられる。MAP p. 153, 7-11ad MAK57=AAA p. 630, 24-27 AにBとの必然関係がない場合、Aが認識されているとき、そのBは必ず認識されるわけではない。例えば、知の本体が認識されているとき、石女の息子が認識されないように。(遍充関係) 求められている諸の形象には、知との同一性と因果性との特徴からなる二種の必然関係は存在しない。(論理的根拠) [求められている諸の形象は認識されない。(結論)] 以上[の推論]は能遍の無知覚(vyāpakānupalabdhi) [因]に基づくものである。(30) 松本(1981) p. 40上段はシャーキャブッディがジュニャーナガルバの AŚ14-16を批判している可能性を表わしている。Cf. 本稿注(18) (31) Māl (2-1)では過去のものからである。(32) 以下シャーキャブッディ批判、松本(1981) p. 43下に訳出される。(33) このTSとŚVとの一致は清水(1983) p. 7による。(34) Cf. 本稿III-2 (35) 森山(2003) pp. 10-11で概要を示した。(36) 森山(2003) pp. 13-14に概要を表わしている。(37) 本稿注(2) 森山(1995) pp. 43-44 (38) śes pa 'i skad cig gñis dag gis // 'dab chags yin yañ de la ni // cha śas bcas gzugs mi 'dod ltar // rdul phlan rnam la 'aṅ de bshin no // (BASK51) 知識の[前後]二刹那には間隔はないけれども、その場合、[知識は] 部分を具えているとは認められないように、諸原子に関しても同様である。BASKのテキストは神子(1986) (39) BASK46=MAV, MAP pp. 52-53→TSP p. 678, 12-13(AAA p. 625, 24-25) tataś ca digbhāgabhedavattvād iti kevalam bahubhiḥ parivāraṇam evoktam syāt na sāvayavatvam したがって、方位分の区別をもつ故にというのは、多くの[原子]が包圍していることをいっているに過ぎないのであって、[諸原子が] 部分を有するというのではない。Cf. 森山(2003) p. 9 (40) gal te mañ por 'dab chags phyir // cha śas bcas par 'dod na ni // skad cig sña phyir 'dab chags la // ci phyir de dañ 'dra mi 'gyur // (BASK50) もし、[諸原子は] 多であって間隔がないから部分を有すると[世親がVśで] 主張するなら、前後の間隔のない刹那[の知識]に関して、何故、それ(原子)と同様に[部分を有すると主張]しないのであるか。(41) BASK46に関しては注(39) (42) Vś12 śaṭkena yugapad yogāt paramāṇoḥ śaḍaṣṣatā / śaṇṇām samānadeśatvāt piṇḍaḥ syād aṇumātrakaḥ // 同時に六個と結びつくから原子には六つの部分があることになろう。六個が同一の位置にあるから丸い塊りも一原子の分量となろう。なおVś k. 12がウッディヨタカラによりNyāyavārttikaに引用されることについては、森山(2015) p. 13, p. 5 (43) 清水(1983) (44) GOSのTS483bによりparāṅgatvāyaと読む(45) ŚVではuttarasyaである。(46) Cf. 本稿III-1 (47) 本稿II-3-2、なおAŚ14-16とTS448, 489とが内容的に類似することは松本(181b) p. 50上段に指摘される。しかし、それが上のTSとŚVとの一致からクマーリラの見解を活用するものであるという言及はない。松本同、p. 61注(12) (48) TS513 vinaṣṭāt tu bhavet kāryam tṛtīyādikṣane yadi / vipākahetoḥ pradhvastād yathā kāryam pracakṣate // 一方、もし第三などの刹那に滅したのから結果が生起するなら、例えば、彼ら(説一切有部)が滅してしまった異熟因から結果が[生起する]と述べているのと同様である。(49) TS514 yaugapadyaprasaṅgo 'pi prathame yadi tad bhavet / sahabhūhetuvat tac ca na yuktyā yujyate punaḥ // もし第一[刹那]にそれ(結果)が生起するなら、同時ということになってしまおう。また、それも俱有因のように道理と合致しない。(50) Cf. 本稿II-4-a (51) Cf. 戸崎

(1979)p. 352fn.(45) PV III5 (52) Cf. PSV, 96a3-5 Hattori(1968)pp. 183-185, 戸崎(1985)p. 40fn. (2), 本稿III-3に表している。(53) AKBh p. 31, 12-13 nirvyāpāraṃ hidaṃ dharmamātraṃ hetuphalamātraṃ ca/ 実際、これ(眼と色とによって眼識が生起すること)は無作用であり、法のみからなる因と果とだけである。Cf. 桂(1983)p. 103上段、次項III-3, PSV, 95b5-7, 96a3-5を参照 (54) Cf. PVIII307-309 (55) 戸崎(1979)pp. 19-20 (56) Cf. 服部(1973)、山崎(1964)pp. 16-17、ŚV 知覚章の和訳、戸崎(1991)p. 342 (57) 戸崎(1991)p. 342では kārakāṇām (58) 清水(1983)p. 32(53) 戸崎(1991)p. 342 (59) Hattori(1968)p. 183, 戸崎(1979)p. 394fn.(1), Cf. PVIII 307- 309, 戸崎(1979)pp. 399-401 (60) Hattori(1968)pp. 183-185, 戸崎(1985)p. 40fn.(2) (61) Cf. 戸崎(1979)pp. 400-401 (62) Cf. 本稿II-4-a (63) TS485=ŚV6-430で批判される、それに対してTS528で因は無作用と答えられる。TS485=ŚV6-430 nāśotpādasamatve 'pi nairāpekṣāyāt parasparam / na kāryakāraṇatve stas tadvyāpārānanugrahāt // 生と滅とが同時であるとしても、相互に全く依存し合うことがない。因果関係は存在しない。その作用から恩恵を受けないからである。[このヤショミトラの生滅同時論に対する批判はカマラシーラよりもクマーリラが先行していることになる。ウッディヨータカラもその批判を表わしている、森山(2016)pp.(121)(122)。それが経量部ヤショミトラ説であることに関しては、森山(1994)p.(153) AKV p. 281, 2-3] (64) 森山(2011)p. 34 (65) そのTS、TSPについては森山(1998)p. 7に表わしたものである。帰謬、帰謬還元法については御牧(1984)pp. 242-243, 谷(2000)pp. 141-143, 178-185. カマラシーラはダルモッタラの影響を受けたと考えられる。ラトナキールティの推論は御牧、同 p. 246、森山(2011)pp. 34-35. (66) 森山(2000)p. 470

(もりやま せいとつ 仏教学科)

2016年11月15日受理